

〔書評と紹介〕

小口雅史編

『海峡と古代蝦夷』

伊藤 武士

近年、地域の歴史と文化の究明を通し、多様かつ豊かな日本史のあり方、新たな日本史像の提示を目指した研究が活発である。本書は、そういった中でも注目度の高い古代北日本、津軽海峡を挟んだ北東北と北海道地域を対象とした論集である。

本書は、主として四世紀から一〇世紀を対象に、「津軽海峡」とそれを挟んだ「交流と交易」、さらにはその担い手であった「蝦夷」をキーワードとして、文献史学と考古学の協業により、北緯四〇度以北の史の実態、その具体像を描き出すことを目的としている。

本書が執筆される契機となったのは、平成二十年度～同二十二年度科学研究費補助金による共同研究『交易と交流の深化と断絶過程からみた、津軽海峡を挟む古代北方世界の実態的研究』であり、その研究成果が盛り込まれている。

その共同研究テーマに象徴されるように、津軽海峡を挟んだ南北は常に一体性を持つ社会を形成していた訳ではない。「蝦夷」を担い手として「海峡」が交流と交易を深化させる時期、または、境界としての役割を果たした断絶の時期があったとされ、本書の各論文でも土器類を中心にその具体的検討が行われている。本書は、交流の深化と断絶。南下と

北上。それら時代により変化する交流の実態把握という、複雑な課題に取り組んでいる。

さらに、本書の対象とする時期には、「蝦夷」だけではなく、阿倍比羅夫北征に関する史料上には「肅慎」の存在が記されている。また「蝦夷」に限ってみても津軽蝦夷と渡島蝦夷などという異なる地域集団の存在が記されている。北方世界で交差する複数の民族的集団と地域集団の存在、その把握という複雑な課題に取り組んでいる点でも、注目される一冊となっている。

本書は三部構成であり、総論、第1部「海峡以北の世界と東北部」、第2部「海峡以南の世界と北海道」からなる。

編者である小口雅史氏による総論では、第1部と第2部に所収される各論考の見解が、「オホーツク文化と続縄文文化の接触」、「肅慎とはだれか」、「北海道から本州への接触」、「擦文文化と北海道式古墳」、「さまざまな東北部の南北交流ルート」などの論点ごとに整理され、まとめられている。その中では、各論文の考古学的検討から導きだされた成果を、史料上で把握される地域集団やその動向と対比する試みなどもなされ、論点ごとに一定の見解が示されている。

次に第1部は、北海道とそれ以北の世界の中での交流、それを前提とした東北部との交流の検討などを行った四本の考古論文からなる。

天野哲也氏・小野裕子氏の「オホーツク集団と続縄文集団の交流」、瀬川拓郎氏の「古代北海道の民族的世界と阿部比羅夫遠征」、中村和之・竹内孝氏の「奥尻島出土のオホーツク式土器をめぐる試論」、小野裕子氏の「続縄文後半期の道央地域の位置について」が所収されている。

第1部を通じて、オホーツク集団と続縄文集団接触の実相について言及され、オホーツク集団Ⅱ肅慎説、続縄文集団Ⅱ渡嶋蝦夷が共通見解となっている。天野・小野・中村・竹内各氏の論文は、土器の文様や施文方法、胎土分析などの詳細な分析や検討からそれを指摘している。一方、瀬川氏の論文では、土器以外の遺物の検討も加え、古代から中世にかけて各時期ごとに俯瞰的に各集団の動向がまとめられている。阿倍比羅夫北征期に史料上に見える民族集団や地名の同定などを積極的に展開しており、北征が古代北方史の転換点となるという見解が示されている。

第2部は、北東北と古代国家「日本国」との関係や、北東北地域内での交流、それを前提とした北海道との交流の検討などを行った四本の考古論文と、文献史学の見地から秋田城・律令国家との関係を軸に北方蝦夷社会の検討を行った熊谷公男氏の論文からなる。

斎藤淳氏の「古代北奥・北海道の地域間交流」、宇部則保氏の「蝦夷社会の須恵器受容と地域性」、八木光則氏の「古代東北における移動・移民」、伊藤博幸氏の「東北北部における沈線文土器について」、熊谷公男の「秋田城下の蝦夷と津軽・渡嶋の蝦夷」が所収されている。

第2部では、北東北の蝦夷社会を考古学の見地から検討し、北海道との交流を把握するために研究者が注目する擦文土器・須恵器・沈線文土器・移民などの要素やテーマが取り上げられている。総体的には、北東北の土器様相を中心として蝦夷社会における地域性や交流ルートなどの把握に、重きが置かれる内容となっている。

北海道との交流について、宇部氏と八木氏の論文は、擦文期における本州の土師器集団の北海道への進出・影響について、度合い差はあるが

言及している。宇部氏論文は、須恵器流通や沈線文土器の成立から、北東北から北海道へ与えた影響を積極的に評価している。また、八世紀中葉に入りに出羽側と道央部との関係が強くなり、その背景に律令国家による秋田城（出羽柵）の造営・設置があるという見解は、秋田城跡の調査担当者である私には、秋田城の造営意図や朝貢交易の実態を考える上で大変興味深い。

また、斎藤氏の論文は、緻密な土器分析から、東北北部の蝦夷文化圏の中の小さな文化圏の存在（陸奥湾周辺域・岩木川・米代川流域・青森県南地域）を把握し、その様相の差異から広域的な北海道側との交流の濃密を紡ぎ出すという方法をとっている。第1部の小野論文と合わせ、広域の地域間交流を論ずるにあたり、各地域で行わなければならない考古学的プロセスの必要性を再認識させられる内容となっている。

本書の主眼である南北交流に関して言えば、全体を通して、続縄文文化の後北C₂・D期における南下、擦文期における土師器集団の北上などといった、津軽海峡を挟んだ交流の大きな動向について掴むことができる。また、各考古論文は、その動向に関係する個別事象について、新たな見解を示している。しかし、それらを統合して北方史の全体像の提示するにはまだ至っていないと編者の小口氏も述べている。

本書では、津軽海峡を挟む古代北方世界の実態把握という大きなテーマについて、現時点の考古学的検討がどこまで可能かを示し、その課題とポイントを浮かび上がらせた点が重要といえる。その意味では、土器類を中心とした研究の現状、最新情報を知る上で最適な内容となっており、今後、文献史学との協業により古代北方史研究を進めていく上でも、

その土台として押さえておきたい一冊となっている。

本書で語られる古代北方世界を大きく北から南へのベクトルで見れば、五世紀以降のオホーツク文化集団の南下や後北C₂・D期における続縄文文化の南下など、民族的集団の動きが指摘されており、それらは新たな日本史像の提示という観点で注目される。その一方で、南から北へ向けた人と物の動き、特に七世紀以降に南から北へのベクトルを生み出す背景については、第2部を通じても十分な検討がなされていないと思われる。

それを知るためには、やはり、蝦夷社会の南に接する律令国家の存在が無視できないといえる。海峡を挟んだ南北交流と北方社会の実相に迫るためにも、律令国家の北方支配の考古学的な実態把握、史料上から読み取る律令国家の北方施策と蝦夷社会との関係把握、それらを統合する考古学と文献史学との協業的研究が、やはり重要となってくる。

編者の小口氏によれば、律令国家の北限支配という視点から、すでに継続的研究がスタートしていると述べられている。本書第2部の最後に所収される熊谷氏の論考は、次なるテーマへの橋渡しを果たしているともいえる。

本書を通じ、律令国家の対北方交流・支配の拠点とされる、最北の古代城柵秋田城の調査担当者である筆者は、古代北方社会の実態について問題意識を新たにするとともに、秋田城の北方支配の実体解明の重要性を再認識することとなった。

複雑性を帯びる古代北方社会の実態について、最新かつ具体的な検討を試みた上で望む、律令国家による北限支配の実態把握という新たなテ

ーマ。それが語られる本書の続編にも期待する次第である。

(高志書院、A5判、二九九頁、二〇一一年十月、六〇〇〇円)

(いとう・たけし 秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所)